

## 私立藤女子中学校様 ドリルタイム利用ヒアリング



私立藤女子中学校 校舎全景

私立藤女子中学校では、2024年7月から3年生の生徒、全員がドリルタイムを利用されています。夏休み明けの新学期を迎えた9月、本校のドリルタイムの導入にご尽力いただいた本堂先生にお話を伺いました。



本堂 正久 先生

Q: デジタルドリルの導入にいたった経緯を教えてください。

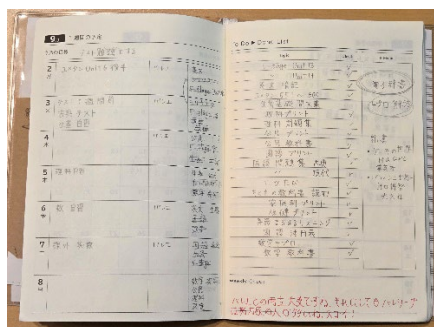
A: 入学時には受験を経てきた生徒でも、3年間の学生生活を経る中で、授業の理解度に差が広がってきます。藤女子中学校では、中学1・2年では学校からChromeBookを貸与し中学校3年生時から個別にChromeBook端末を購入していることもあり、そうした生徒が、端末を活用し、過去の学習内容を振り返ることのできるオンラインドリルの導入を考えていました。

導入の検討にあたり、複数社のデジタルドリルとも比較したところ、ドリルタイムは生徒の所属学年をまたいで主要な5教科を学習できることや、直ぐに「答え」を表示させるのではなく3回の誤答のあとに正解を表示させるなど、しっかりと生徒が考える暇（いとま）をおいて正答を表示させる方式のドリルであるというところに共感し、導入に至りました。

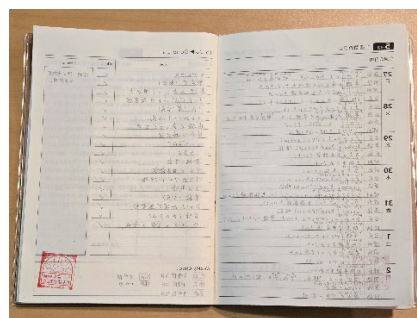
Q: ドリルタイムをどのような時間（場面）で主に利用されていますか？

A: 藤女子中学校では7月からドリルタイムを導入していましたので夏休み前から、生徒に対しドリルタイムの説明や、2学期以降の運用方法を記したプリントを配布し、利用していました。現在、生徒は『毎日の朝学習として、自分の苦手とする1教科を選択してドリル問題に取り組むこと』としてドリルタイムを活用しています。担任は、1カ月ごとなどの一定期間の学習ログデータを参照し、継続して学習に取り組んだ生徒の学習手帳「フジロク」(※)に「頑張ったしるし」としてスタンプを押すことで、手に取って見える学習記録としています。

藤女子中学校は、中高一貫校ではありますが、中学校3年生の2月から3月にかけて、高等学校への進学に向け、個々の生徒が自身の「フジロク」を手に学校長と面談をする機会があります。生徒へは、学校長が「フジロク」を参照することで、夏休み以降の継続した学習の状況がわかる旨を周知し、学習意識を喚起する一方で、1年間をとおして継続して学習に取り組んできた生徒や、学習時間や学習回数などの数値にとられない様々な項目をクリアしてきた生徒へ「賞」を設けることとしており、ドリルタイムによる日々の学習のモチベーションをあげる仕組みとしています。重要なのは、たくさんの課題に取り組むことではなく、日々の学習に継続して取り組むことだと考えています。



フジロクの様子



フジロクの様子

※藤女子中学校では、生徒が自身の学習を自ら管理する学習手帳「フジロク」を使っています。

Q: 紙のドリルは利用していますか？また、ドリルタイムとはどのように使い分けていますか？

A: 個々の生徒の復習としては、ドリルタイムに一本化しています。ただ、紙のドリルの利点として、授業中に学習箇所を支持しやすいことや、タブレット欠点として電源が切れてしまうと何もできなくなることを考えると、まだ、紙のドリルに軸足を置いています。

ドリルに取り組むということは、授業で得た知識を「道具」とすると、その「道具」が本当に使えるのか否かを、多方面から問題に取り組むことで確認する作業になります。「書く」という学習活動も重要な確認作業と考える一方で、デジタルドリルでは、その確認作業が紙のドリルよりもスピーディにできることから、現在は紙のドリルとの併用を考えています。

Q: ドリルタイムを利用した、生徒の反応を教えてください。

A: 紙のドリル学習だけでは物足りなさを感じる学習意欲が高い生徒は、ドリルタイムのように短時間のうちに多様な問題が矢継ぎ早に出題され、自身の知識と紐づけて学習の幅を広げることのできることにおもしろさを感じているようです。一方で、それまでの学習内容にウィークポイントを抱える生徒は、3年生でありながらも1年生、2年生の問題に取り組む必要があることを改めて実感し、そのことに危機感を持ってくれているようで、そうした雰囲気も良いと感じています。